

虐げられた出戻り姫は、

こじらせ騎士の執愛に甘く捕らわれる

プロローグ

四本柱の巨大な寝台は、赤い天鵝絨^{ビロード}の天蓋布で覆われていた。

蠟燭がいくつも灯され、灯影に黒い影が蠢^{うごめ}く。

『う……うあ……ひ……』

天蓋の下に響くのは、聞くに堪えない淫らな自分の声。大きな節くれだった手がジュスティヌの肌をまさぐり、秘密の場所を探る。

恐怖で身体は強張り、ジュスティヌの目じりからは絶え間なく涙が零れ落ちていく。

心は凍りつき、涙も涸れ果てたと思ったのに、終わりのない凌辱に自然と身体は反応するようになった。

身体は感じているのかもしれない。でも、心と身体が乖離して、快感を受け止めることはできない。ただ、心のない身体が意志によらずに発する、媚^こびるような喘ぎ声をまるで他人事のように聞いている。

心がすり潰されていくような、絶望だけが支配する時間。感じているのは自分であって、自分ではない。だが反応して、淫らな声を上げるのは必要なことだと、ジュスティヌはこの六年で学

んだ。

身体が反応しなければ、淫らな責めが本格的な暴力に代わるだけと、嫌と言うほど知らされたから――

『う、ああっ……』

身体が細かく痙攣する。身体が絶頂すれば、男の責めは、いったん止む。ここから終わりのない罵倒が朝まで続くかもしれないが、それでも達することなく責められ続けるよりは、はるかにまし――。そんな風に思ったその時。ジュスティヌを苛さいなんでいた男が、突如、歓喜の声を上げた。

『見る、勃はつたぞ！』

朦朧とした頭で目線だけを動かせば、でっけい太った腹の肉の下あたり、何かが天を向いてそびえ立っていた。何が起こったのかとっさに理解できないでいたジュスティヌをよそに、男は下卑た笑顔を歪よこしまませて、彼女の上にのしかかってきた。

『ようやくだ――この時を待っていたぞ、わが姫よ――』

――重い。潰される。

いつもと違う男の動きに戸惑いと恐怖を覚え、反射的に両の目を固く瞑る。ジュスティヌの耳をつんざく獣のような咆哮が響き、次の瞬間、ズシッと何かに体が押し潰された。

そしてそのまま、重みで息もできない。

あまりの重みに耐えかねて、おそろおそろ目を開ければ――

真上にのしかかる男は白目を剥き、口から泡を吹いていた。

すさまじい形相を目にして、ジュスティヌが渾身の力で男を突き飛ばす。ゴロンと転がった男は、すでに息絶えて――

「い、いやあああああ！」

自分の悲鳴で目を醒まし、寝台の上に起き上がる。全身、びっしょりと汗をかいていた。

また、あの夢――

ジュスティヌは荒い息を吐いて額の汗をぬぐい、蝋燭の灯る部屋を見まわして、そこが郊外の離宮だと思い出した。

あの恐怖の夜は、過去のこと。あの男は死んだ。なのに、いまだに夢は彼女を苛さいなむ。

ジュスティヌは上掛けをめくり、寝台から足を下ろすと、素足のまま窓に近寄った。

直接、庭へ降りられるようになっていたガラス窓からは月の光が煌々と射し込み、ジュスティヌの影が室内へと長く伸びる。

窓から見える月は青白く輝き、ほぼ満月だった。

――あの湖には、月が映るだろう。

そう思うと、ジュスティヌは衝動を抑えられなくなる。

――空の月は、遠すぎる。水に映る月を見たい。

そんなくだらない理由での外出のために、夜中に護衛を起こすのは気が咎めた。

少しだけ。すぐに、戻ってくれば――

ジュステイーヌは部屋の隅の長櫃ながびつを開け、綺麗に畳まれたフード付きのマントを取り出し、羽織る。布靴に足を入れ、そっと、音を立てぬように窓を開け、夜の庭に踏みだした。

初夏の夜の空気は湿気を含んで心地いい。夜の闇も、なぜか怖くなかった。

離宮の畔ほとりにある湖に続く道は満月に照らされ、迷う恐れはない。

遠くの森でフクロウが鳴いている。松林を抜ければ月の光に煌めく湖が広がっていた。暗い湖面に映る金色の月に吸い寄せられるように、ジュステイーヌは足を早めた。

宵闇の空には眩く輝く銀の月。月の光を浴びながら、ジュステイーヌは棧橋に降り、フードを外した。湖面をわたる風が、結わないままの長い髪を巻き上げる。

さざ波の揺れる湖面に浮かぶもう一つの月を、ジュステイーヌは時間を忘れて見つめていた。

第一章 出戻り姫

長い紛争に終止符を打つために、ノール王国は末の王女ジュステイーヌを隣国の大公に嫁がせた。大公は四十も年上で、祖父と孫のような年齢差であった。

その婚姻により両国の間には和平が築かれたが、六年後、大公は急死する。

——死因は、腹上死。

王女ジュステイーヌは夫に死なれて帰国し、六年ぶりに故国の土を踏んだ。

黒い喪服に身を包んだ王女の姿を目にして、誰もがその変貌ぶりに息を呑んだ。

かつてのジュステイーヌは末姫として甘やかされて育ち、歩くだけで光を振りまくような明るく天真爛漫な少女であった。だが、未亡人となった彼女からその輝きは消え、全身から憂いと悲しみと、今にも消えてしまいそうな儚さを滲ませていた。

煌めくハニー・ブロンドは黒いヴェールの裡うちに隠されていた。黒いレースの手袋をはめた手が極細の黒糸で編まれたレースのヴェールをのけ、ようやく青空を映した澄んだ湖の色をした大きな青い瞳が現れた。

瞳の色は以前と同じ。だが、金色の睫毛に縁どられた青い瞳は不安げで、どこか虚ろであった。亡き大公は孫のような年齢のジュステイーヌに偏執的に執着し、離宮に閉じ込めて外界との接触を絶たせ、夜ごと責め苛さいなんでいたという。挙句の果てに、ジュステイーヌとの関事の最中に死亡した。

大公の死の直後、離宮から救い出された彼女は満身創痍で、虐待の痕跡がありありと残っていたという。極秘の報告を受けた王も、そして王太子マルスランも激怒した。

実を言えば、ジュステイーヌをそのまま国内に留め、虐待の事実を隠そうとした隣国との間で、両国の緊張はあわや開戦一歩手前まで高まった。

ただ、ジュステイーヌの犠牲がもたらした平和を、ジュステイーヌを理由に壊すべきでないと、王と王太子マルスランはギリギリで怒りを抑え込んだのである。

この六年で、隣国との力関係は逆転していた。

大公の晩年、隣国の政治は乱脈を極め、浪費と不正で国力が低下した。その一方で、和平によって抑えた戦費を産業の復興に充てた王国は、上り調子であった。

王国の平和と繁栄は、ジュスティヌの不幸な結婚によって支えられていた。

王も王太子マルスランもそのことを強く意識し、出戻ってきた末の王女には今度こそ幸せな結婚をと、願ってやまないのであった。

「そなたをジュスティヌ王女の護衛騎士隊長に任命する。他に配下を数名、近衛隊と協議の上で選び、候補者の名簿を提出せよ。選出の条件については近衛とマルスランに尋ねるように」

王の執務室で、玉座の横に立つ王太子マルスランに告げられて、近衛騎士のラファエルは片膝をつき、騎士の礼を執った。

煌めく銀色の髪に、濃紺に銀糸の装飾付きの豪華な制服がよく似合っている。すらりとした均整の取れた体つきに、冷たいほどの美貌の持ち主だ。まっすぐに王とマルスランを見上げる紫色の瞳には真摯な忠誠が込められ、率直で生真面目な人柄が表れている。

王女の護衛となる正式な任命書を渡し、王は人払いしてラファエルに言った。

「そなたをジュスティヌの護衛の責任者に任命するのは、人柄や騎士としての技量ももちろんだが、先だつてのヴィトレ砦での功績に、まだ報いていないためでもある。いずれは然るべき爵位と

領地をと思うが、知つてのとおり、いろいろとうるさく言う者たちがおるからな」

言い訳がましい王の言葉にも、ラファエルは端麗な表情を崩さず、頭を下げた。

「何事も陛下のお考えのままでございますゆえ、臣下として言うことはございません。さらなる精進に励むのみでございます」

「うむ、その……隣国の大公とジュスティヌの結婚は不幸であった。心に傷を負って戻ってきている。修道院に入りたいなどと言い出しておつて……」

その言葉に、ラファエルが初めてハッと表情を変えた。

「なんと……！ あのお若さとお美しさでもつたないでございます」

「うむ。自ら修道院に駆け込むようなことはしまい。だが、けして目を離さぬよう、心してくれ」

ラファエルは青ざめた顔で大きく頷いた。

「は！ 身命に替えましても、姫の御身を守ると誓います！」

任命書を手にしてラファエルが執務室を出て行くと、周囲に人のいなくなった機会に、マルスランが言った。

「父上……ラファエルにはまだ、届け出た婚約者もおりません。彼はいずれ私の右腕となるべき有望株です。ジュスティヌと結婚させ、先の功績と合わせ、王都に近い領地に封爵したいのですが」

ラファエルへの封爵が滞っているのは、封地とするべき土地が十分に確保できないせいだ。

ジュスティヌは帰国にあたり、持参金として持っていた国境地帯の封地を、迷惑料代わりに

持ち帰っていた。

ジュステイーヌの持ち帰った国境地帯の領地を中央の王領と領地替えし、王都に近い土地をジュステイーヌと婚姻した者の封地に与え、国境地帯の封地は新たな封爵地とする。

マルスランの提案は、滞った褒賞とジュステイーヌの結婚問題を同時に解決できる一石二鳥の妙案だ。しかし王は懸念を示した。

「封爵の件はそれでよい。だが、ジュステイーヌの様子から言っても、結婚を急がせるべきではない。そもそもジュステイーヌは——」

王は言葉を濁す。王として、そして父親として、ジュステイーヌの結婚を押し切れない理由があった。

マルスランは、そんな王に非難のまなざしを向ける。

「父上、ジュステイーヌは仮にも王女です。独り身のまま置いておくことはできません。どこかに縁付けるなら、条件的にもラファエルが最適と私は考えます。彼の父親であるジロンド伯爵は王党派で、廷臣としての信頼も厚い。本人の性格も篤実で信頼がおけます。父上さえ賛同してくださるのなら——」

「あの容姿と家柄で、今まで婚約者もないのは、何か理由があるのではないか？」

マルスランが肩を竦めてみせた。

「彼は次男で、継ぐべき爵位がありません。——これは王宮内の噂ですが、どうもアギヨン侯爵の令嬢に求婚して、断られたようです」

「アギヨン侯爵……？」

王が、眉を顰めた。ヴィトレ峠で功績を上げたラファエルらに対しての叙爵を、強硬に反対した貴族派の筆頭こそ、アギヨン侯爵であったからだ。

「ラファエルの実家ジロンド伯爵は王党派の最右翼、対してアギヨン侯爵は地方諸侯の雄、対立する陣営にあります。どうやらアギヨン侯爵は、爵位も領地もない男に娘はやれぬと、求婚を突っぱねたようです」

王はしばし沈黙し、ゆつくりと口を開いた。

「……つまりアギヨン侯爵は、ラファエルに対しては爵位領地のないことを理由に求婚を断っておきながら、いざラファエルが功績を上げて封爵のチャンスがめぐってきたらそれを潰した、ということか？」

「そうなりますね。ラファエルは彼女のために、他からの縁談をすべて断っているとか」

マルスランの言葉に、王は顎に手を当てて唸る。

「……それは、ジロンド家としては複雑であろうな」

考え込んでしまった王に対し、マルスランが言う。

「ラファエルは王家に対する忠誠心が篤く、何より次男で、家を継がせる必要があります。ジュステイーヌの婿として、これ以上の条件の男はいないかと……」

マルスランの言葉に、王がハツとして息子を見た。

「医師からの報告書はご覧になりましたよね？ 後継ぎが必要な家に、ジュステイーヌはやれませ

ん。次男以下で爵位のない男では、国法として王女を降嫁させることができない。また、すでに後継ぎのいる家は後妻となってしまう。若く見目の良い、次男以下で封爵可能な功績持ちの男が、ラファエル以外にいますか？」

王はじつとマルスランを見つめ、言った。

「なるほど。余からジロンド伯爵に話してみよう。王家からの申し出を、伯爵は断るまい」

第二章 湖に映る月

故国に戻ったジュステイーヌは、王宮の片隅の独立した棟を与えられた。

まだ幼い頃に嫁いだジュステイーヌは、大公にとつて妻というよりは無知で無垢な人形であり、淫らな欲を満たすための玩具でしかなかった。大公は彼女を離宮に閉じ込め、外界との接触を禁じていた。

そのため、十八歳になったジュステイーヌは身体つきこそ成長したものの、ダンスや楽器など、淑女としての教養もすべて中途半端。王妃や兄マルスランが手配して教師を捜し、中断していた勉強のやり直しが始まった。

子供の頃は勉強なんて大嫌いだっただけで、今は学ぶことが楽しい。

帰ってきたのだ、とジュステイーヌは六年ぶりに祖国の歴史書をひもといて思う。

でも――

六年前と同じ王宮でも、何かが決定的に違っている。

隣国で夫から虐待を受けていたせいで、ジュステイーヌは男性を恐れるようになっていた。

とりわけ、大公と年齢や体格の似た男性に恐怖を覚えるため、教師や側仕えも女性が揃えられたが、護衛騎士となるとそうはいかない。

以前は未成年の王族だったので専属の護衛騎士はおらず、外出時に近衛から適当に選抜していたが、帰国後は十人の近衛騎士が専属として護衛に当たることになった。ジュステイーヌが恐怖心を抱かぬよう、若く細身の者を選び、かつジュステイーヌの目にあまり触れぬような配慮がなされている。

隊長のラファエルは、年齢二十二歳。王都近郊に領地を持つジロンド伯爵の次男だという。

輝く銀髪に紫色の瞳をして、彫刻のような美貌は硬質で冷たい印象すらあるが、生真面目な物堅さがそれを補っている。近衛騎士は儀式的儀仗を務めることもあり、見かけ重視で選ばれることが多い。その美男揃いの近衛の中でも、ラファエルの美貌は群を抜いていた。

彼が近衛に配属になったのはジュステイーヌが隣国に嫁ぐ直前であったが、乳母はその時のことを憶えていた。

『ええ、大変な美少年でしたから、印象に残っていますよ。あの頃は王太子殿下付きでしたが、侍女たちが騒然となりましたからね』

乳母が言い、帰国後に付けられた侍女が話を引き継ぐ。

『見かけに反して生真面目な性格で、器量自慢の女たちが何人も言い寄ったそうですが、彼は眉一つ動かさず、すげなく追い払ってしまった。女性に興味がないのかしらね。氷の騎士だなんて言う人もいるわ』

『マルスラン殿下が姫君の護衛騎士に抜擢するくらいですから、女性には潔癖なのでしょう』侍女たちの噂話を聞きながら、ジュステイーヌはなんとなく、自らの護衛騎士を目で追う。

交代の打ち合わせらしく、配下の騎士と小声でやり取りする何気ない動作も洗練されている。夜空のような濃紺のマントに銀の髪が映えて、煌めいていた。

——氷というよりは、銀色の月のような騎士ね。

性格が堅いだけでなく、その際立った美貌はどこか現実離れしている。それがジュステイーヌに恐怖心を抱かせない要因となっているのだろう。

護衛の分を守り、必要以上にジュステイーヌに近づくこともなく、彼の方から話しかけることも滅多にない。

男性を恐れるジュステイーヌの目に触れぬよう、ひっそりと、だが何かあればいつでも駆けつけられる距離を保って立っている。問題は、本人は目立たぬようにしているつもりでも、どうしても周囲の視線を集めてしまうほど、彼が美しいということだ。

——美しいけれど、空の月のように遠い。見上げればいつもそこにある……

ジュステイーヌもまた、その美しさに惹きつけられるように、ついついラファエルを見つめてしまう。しかしそれは単純に美しいものを愛するような、そんな心持ちからであった。

臣下に降嫁した姉たちから、さまざまな誘いがあるけれど、ジュステイーヌは極力断っていた。国王の強い希望もあって喪服は脱いだが、年齢相応の華やかなドレスを着ることは抵抗があつて、未亡人らしく装飾の少ない抑えた色味のドレスばかりを身に纏っている。

ひっそり、静かに——

帰国して嬉しい気持ちと、このまま消えてしまいたいような気持ちだが、ジュステイーヌの中でせめぎ合っていた。

そんなジュステイーヌの楽しみは、天気の良い日に庭園を散策することだった。

庭園の池の周りを歩いて、生垣で作られた緑の迷路を通り抜ける。薔薇園で香りを楽しみ、小さな森の小道に入っていく。この森は王宮の中にありながら、いくつもの巨木を残して野生の森のような風情があった。

侍女二人と護衛騎士のラファエル、少し離れてラファエルの部下数人が、いつでも駆けつけられる位置で伴としてつてくる。

森の中に入るとジュステイーヌはほっと息をついて、白いヴェールを外して蜂蜜色の頭を露出させた。サイドで編み込んで上半分だけ結い、真珠をあしらった金糸のネットで覆い、下半分は背中に垂らしている。装飾らしい装飾はそれだけだった。

高い梢から降り注ぐ木漏れ日を浴びて、ジュステイーヌの金色の髪が光を弾く。梢を見上げる横顔のほっそりした顎から首筋のラインと、小さな耳、少し開いた花の蕾のような唇。隣国から戻っ

てきた日の痛々しさはないものの、なんとも言えない不安げな、儚い雰囲気はそのままだ。

「姫様、リスが……」

侍女の一人が指差す枝の上を、茶色い小さな生き物が走っていく。

ジュスティーナは目を見開いて、微笑んだ。

「久しぶりに見たわ！ 昔は毎日のように来て、いつか捕まえてやろうと追いかけたものよ」

「ほんとに、あのころの姫様はお転婆で……」

「木登りは毎日、噴水の池に落ちたこともありましたわね」

懐かしそうに言う侍女の言葉に、背後にいたラファエルがおずおずと尋ねる。

「その、すみません、姫が、池に落ちたのですか？ いったいどういった状況で？」

普段、ひっそりと気配を消しているラファエルから話しかけられて、ジュスティーナは少しばかり驚いた。とっさに、どう答えてよいかわからずどぎまぎしてしまう。ジュスティーナの困惑した様子を見たラファエルが、慌てて言い訳のように言葉を継いだ。

「いえ、姫が水に落ちるようなことは、普通はあり得ませんので、いったいどういった状況から発生した事件なのか、その時に護衛はどうしていたのか、気になりまして……」

彼の、生真面目さと仕事熱心さの表れだと気づいたが、ジュスティーナは昔の失敗を暴露した侍女を軽く睨んだ。

「やめてよ、ラファエルの前でそんなことを言うのは。彼は昔のわたくしの姿は知らないのに」

「だからこそ、教えて差し上げているのでございますよ。今後の対策に」

「そうですとも」

侍女たちがコロコロと笑いながら言い返すのに、ジュスティーナが頬を膨らます。このままでは、無様に池に落ちたみつともない王女だと思われかねないと、ジュスティーナがツンとすまし顔で言った。

「落ちたのではなくて、泳ぐつもりで自分から池に飛び込んだのよ」

「は？ ご自分から？ 泳ぐ？ え？」

ラファエルが紫色の目を見開くのを見て、ジュスティーナはむしろ状況を悪化させたことによりやき氣づいた。

「ほらご覧なさいな、昔の姫様のお転婆ぶりときたら、本当に命知らずでしょう？」

「そうですわよ、噴水の池で泳ごうとした王女なんて、姫様ぐらいですわ。あの時はドレスが水を吸って重くなつて、脚に纏わりついて身動きも取れなくなつてしまつて……」

こもこも言う侍女たちの言葉に、ラファエルが顔色を変える。

「ぶ、無事だったのですかっ！」

詰め寄られ、ジュスティーナは慌てて言った。

「今生きているんだもの、無事に決まっているでしょう？ あの池、子供の膝くらいの深さなのよ？ 溺れる方が難しいわよ」

その言葉に侍女たちもクスクスと笑い合い、ラファエルもまた、ホッとしたように表情を緩める。普段の無機質な美貌とは違う人間味を感じて、ジュスティーナの心に昔のような悪戯心が萌す。急

に、しかつめらしく後をついてくるラファエルをからかってみたくなったのだ。
新調したブルーグレーのドレスの裾を持ち上げ、森の小道を走り出す。

「姫様！ どうなさったのです！」

「姫様！」

「ちよつと走りたくなっただけ」

突然のことに動揺する侍女たちをしり目に、ラファエルは素早くジュスティヌを追いかける。
追いつかれないよう、ジュスティヌもスピードを上げ、小道を一目散に走り抜け、森の奥の巨樹に突進して、その幹に抱き着いた。

昔はこれくらい走ったってなんともなかったのに、心臓はバクバクと激しく脈打ち、呼吸は乱れ、肩で大きく息をしていた。振り返れば、ラファエルは全く呼吸を乱すことなく背後に立っていた。

「姫様、侍女殿たちは走るのに慣れていませんので……」

ラファエルに苦言を呈^{てい}されて、ジュスティヌは悪戯を咎められた子供のように肩を竦めてみせる。

無茶をしても、危険があっても、彼ならば何があっても自分を守ってくれるだろう、そんな安心感にジュスティヌの胸が少し熱くなる。

遅れて、侍女たちが息を乱して追いつき、ラファエルの配下の騎士達も剣帯を鳴らしながら走ってきた。——そうだ、昔から、この国では守られていた。周りの人々すべてに。

ジュスティヌの胸に、幼い日々の懐かしい思い出が甦^{よみがえ}ってくる。

この国で、ジュスティヌはすべての人に愛されていた。少なくとも自身はそう、信じていた。
やんちゃやお転婆の限りを尽くしても、叱られこそすれ、誰も自分を傷つけず、守るべきものとして大切に扱^{あつか}ってくれていた。

——それを、当然のことと甘受していた。愚かな子供として守られた、かけがえのない幸せな時間だった。そしてそれはもう、戻らない……

「ごめんなさい。つい……どこもかしこも昔と同じだから、自分も昔に戻ったような気分になってしまったの。もうしないわ」

ジュスティヌは抱き着いている大樹の梢を見上げ、誰に言うともなく呟く。大きく広がった枝の緑の葉の隙間から青い空が覗き、木漏れ日が降り注いでいる。

この風景は、昔と同じ。

ジュスティヌは大樹から離れ、周囲を回る。

「この樹は、森の主^ヌなのよ。……変わってないわ。昔と同じ。森も、庭も、お城も……わたくしだけが、変わってしまった」

六年で一番大きく変わったもの。それはほかならぬジュスティヌ自身。

梢を見上げていた視界が潤み、涙で歪む。熱い涙が、目じりから零れ落ちた。

「姫……？」

ジュスティヌの涙を見て、ラファエルが動揺したのか、声をかけてくる。

ジュスティヌは涙を振り払うように首を振った。

「あの頃は、世界に辛いことがあるなんて、想像もできなかった。毎日が楽しくて、それが永遠に続くと思っていたわ。隣国と戦争が続いて——それで、亡くなったり苦しんでいる人がいると知って、わたくしが嫁ぐことで戦争が終わるなら……そんな力がわたくしにあるならって、迷うことすらなかった……」

ジュスティーナの独白を、ラファエルが無言で聞いている。

「お父様もお兄様も辛そうなお顔をして、何度も詫びてくださった。お母様は泣いて、おばあ様は怒っていらした。でも、わたくしは自分が役に立てるのが嬉しかったの。たとえ相手がお年を召した方でも、自分から誠意を尽くせば仲良くできるって思ってたわ。幸せになれると信じて、疑ってはいなかった……」

ジュスティーナはもう一度大樹に抱き着き、目を閉じてその幹に額を預ける。樹上から降り注ぐ木漏れ日が、ジュスティーナの金色の髪と頬に流れる涙に反射して煌めいた。

王女の責務として、平和のために身を捧げたつもりだった。

しかし、隣国で待っていたのは、ジュスティーナには予想もできない仕打ちだった。

王女としての矜持も打ち砕かれ、人としての尊厳まで踏み躪られた。

ただ、あの醜い男の欲望のために——

「もう、二度と帰れないかもしれないと思っていたけれど、わたくしは帰ってこられた。でも、帰ってきたからって、全部元通りになるわけじゃないのね。……時間が、戻るわけじゃないから」
変わってしまった自分は元に戻らない。

傷痕も、傷つけられた辛い記憶も消えない。

王宮ですれ違ふ誰も彼もが、ジュスティーナがかつての彼女ではないことを知っている。

「姫……その……」

背後に立つラファエルが明らかに動揺して、どうすべきか思いあぐねているようだった。

「ごめんなさい……突然、変なことを言って」

「いえ……」

美しい護衛騎士に自分の弱さをつい、吐露してしまい、ジュスティーナは急に恥ずかしくなる。

こんなことを話すべきじゃなかったかも。でも口に出してしまった言葉は取り返すことはできない。どうしようかと俯いてしまったジュスティーナを見て、ラファエルが慌てて首を振った。

「その、急に走ると侍女殿たちはびっくりするかもしれないませんが、俺はついていきますから、姫が望むようになさってくださいって構いません。どんなに走っても、池に落ちても、何が起きても俺は大丈夫です。俺はその……丈夫なだけ取り柄なので……」

「そう、丈夫な、だけが？ え？ ……」

月の光が零れるような美貌の騎士の言葉に、ジュスティーナは目を瞬いた。

——この人はもしや鏡を見たことがない……？

そんな別の疑問に囚われたせいか、いつの間にか涙は引っ込んでしまった。

ジュステイヌは祖母である王太后の病氣見舞いを兼ねて、王都郊外の湖の畔ほとりにある、離宮を訪問することになった。

王太后は末の孫娘を溺愛し、隣国に嫁がせるのを最後まで反対していた。息子である王への怒りが強すぎて、王宮を出て離宮に居を移したくらいであった。

ジュステイヌの帰国を何よりも喜んでいたが、体調を崩したせいで対面が叶わずにいた。それで、ジュステイヌの方から離宮に足を運ぶことにしたのである。

六年ぶりの孫との再会で、王太后は夏風邪も吹っ飛ぶほどの回復を見せ、侍医を驚かせた。

折しも、離宮は薔薇の盛り。祖母や家族との再会の喜びにジュステイヌの顔色もよくなり、怯えた表情は影を潜めて、明るさを取り戻しつつあった。

離宮の庭園は湖に面していて、直接、棧橋に降りられる。小舟がいくつも繋がれていて、遊覧用の大きな白い屋形船もあった。

散歩がてらに湖まで足を伸ばし、ジュステイヌは煌めく湖面を見下ろした。

「昔はよく、あの屋形船に乗ったわね」

ジュステイヌの言葉に、背後に控えた侍女が微笑む。

「そうですね。……今回は王太后陛下がご不例でしたので、舟遊びは致しませんでした、次の

機会にはぜひ」

ジュステイヌは棧橋に並ぶ小舟を見まわして言った。

「この小舟は、湖上祭の時にも使うの？」

「ええそうです。湖の女神を祭るために、湖の上の小舟はたいがい、出払いますね」

ジュステイヌは足を止め、湖の向こうの森を眺める。

森は全体が女神の神域になっていて、毎年、八月の満月の夜にはたくさんの松明や灯籠を湖上に掲げて、女神を祭るのだ。

「懐かしいわ……わたくし、小さなころあの舟に乗りたくて駄々をこねて、お兄様に叱られたのよね……」

ジュステイヌは青い目を細め、幼いころの思い出に浸る。

嫁ぐ前の湖上祭の夜、離宮に作られた見物用の棧敷きじきから、湖を眺めたのだ。

たくさん松明と灯籠の光が溢れ、湖面には金色の月が映って――

その記憶と直前まで閉じ込められていた、隣国の離宮の中庭の風景が重なる。

四角い中庭には、中央に噴水のある四角い池があった。周囲の建物が高いので、上天に上るまで

月は見えない。その月が、四角い池の水に映って揺らぐ。

大公の訪れない夜だけ、それを眺めることができた。

水に映る月を見ながら、ジュステイヌは祖国の月を思い出していたのだ。

幽閉中の記憶を思い出したその夜、ジュスティヌは過去の悪夢にうなされていた。

四本柱の巨大な寝台は、^{ねど}闇というよりは牢獄だった。天蓋布に覆われた内部に蠢く黒い影。ジュスティヌにのしかかり、押さえつけ、力づくで暴く恐ろしい男。

——いや、怖い……助けて……

心の声は口に出すことは叶わず、それはジュスティヌの意志によらない、淫らな喘ぎ声となつて零れ落ちる。

冷たい汗が噴き出て、身体が燃え盛っているのに、心は氷のように冷え切っていた。

——怖い、怖い……

屈辱的な行為に身体だけが絶頂して震えるジュスティヌに、あの男が言った。

『見ろ、勃ったぞ！』

ぼやけた視界の向こう、でっぷり太った腹の肉の下あたり、何かが天をついてそびえ立っていた。それが何かわからないまま、男がジュスティヌの上にのしかかってくる。

『ようやくだ——この時を待っていたぞ、わが姫よ——』

反射的に両の目を固く瞑れば、ジュスティヌの耳をつんざく獣のような咆哮が響いた。次の瞬間、男の全体重がのしかかって押し潰され、息もできない。

そのままピクリとも動かなくなった男は——

白目を剥き、口から泡を吹いて——

「い、いやあああああ！」

自分の悲鳴で目を醒まし、寝台の上に起き上がる。全身、びっしりと汗をかいていた。

また、あの夢——

ジュスティヌは荒い息を吐いて額の汗をぬぐう。

あの、離宮の寝台でない。ここは——そうだ、おばあ様の離宮に来ていて……

ジュスティヌは深く息をつく、枕元の水差しからグラスに水を注ぎ、一息に飲み干した。生ぬるい水が喉を通っていく。

ジュスティヌは寝台をおりて、素足のまま窓に近寄り、カーテンを開けてみる。

ガラス窓の向こうに、煌々と輝く白金の月が見えた。

この部屋からは、空の月が見える。あの離宮とは違う。でも……空の月は、遠すぎる。

どうしても湖に映る月が見たくなったジュスティヌは、一人、そっと抜け出すことにした。一瞬、ラファエルの銀の髪が浮かんだが、わざわざ起こす勇気がない。

——だって、なんて説明するの？ ただの我儘だと言われてしまうかも……

ジュスティヌはフード付きのマントを身に纏い布靴をひっかけて、そっと夜の庭に踏みだした。遠くの森から響くフクロウの啼く声を聴きながら、離宮の畔の湖まで、満月の下を駆けていく。

松林を抜ければ月の光に照らされた湖が広がっていた。暗い湖面に映る金色の月に吸い寄せられ、ジュスティヌは足を早め、棧橋に降りた。

どれくらい、そこにいたのか。

栈橋に腰掛け、素足を湖水に浸して水を蹴りあげては、月光に煌めく水の飛沫を眺めていた。波に揺れる月の影を見つめていたジュステイーヌは、背後から呼びかけられて我に返る。

「姫——！」

振り返れば、銀色の髪を月の光に煌めかせた騎士がマントを靡かせて駆けてくる。

護衛騎士のラファエルだった。相当走ったのか、珍しく息を乱している。

「姫、困ります。必ず護衛をお連れください！」

すぐに戻るつもりが、時を忘れて月に見入っていた。きっと、ラファエルはもぬけの殻の寢室を見て泡を食って探しまわったことだろう。

そう思うと、申し訳なさでこのまま消えてしまいたくなる。ジュステイーヌは眉を下げて、ラファエルを見上げた。

「ごめんなさい。……ついてきてもらうのが、申し訳なくて……」

「今頃、皆で姫様を探して走りまわっています」

「ごめんなさい」

栈橋に降りてきたラファエルにもう一度謝る。すらりと背が高く均整が取れた体つきは、月光に照らされて、神殿に置かれた彫像が動き出したかのようなだった。

「月が、見たかったのですか？」

ラファエルの声にはただ安堵が溢れていて、咎める色はない。ジュステイーヌはそのことにホッ

とすると同時に、なおさら申し訳なく思う。

「ええ……水に映った月が、見たかったのです」

部屋の窓から見上げる月ではなく、水に映った月が見たかった。だから——

そう言えば、ラファエルが月を見て、そしてジュステイーヌを見た。その視線に耐え切れず、ジュステイーヌはラファエルから目を逸らし、湖に映る月に目をやる。

「あの国では、四方を囲まれた中庭のある離宮から、出ることは許されませんでした。中庭には噴水のある四角い池があつて——月の夜は、水に映る月を見ていました」

ラファエルが、息を呑む気配を感じる。同情を買いたいわけではないけれど、心配をかけた彼には理由を話さなければならなかったのだ。

——月夜には、水に映る月が見たい。なぜなら、それだけが許された自由だったから。そんな理由で護衛の手を煩わせていいはずがない。

いっそ叱責してくれば、謝って誤魔化してしまえるのにと、ジュステイーヌは言葉を探した。ラファエルが何も言わないので、ジュステイーヌはさらに焦って言葉を紡ぐ。

「そこにならないのに、そこにあるように見えて、歪んで、崩れて……幸せて、水面に映る月のようにだと思わないこと？」

「姫……」

無言の時間が流れ、湖面が揺れ、水に映った月も揺れる。森からの風が吹き抜け、結わなままのジュステイーヌの長い金髪を靡かせる。

不意に、ジュスティヌの横で、ラファエルが膝をついた。

「姫。俺に、騎士の誓いを立てることをお許しください」

「な、なに？ どうしたの、ラファエル」

いったい何を言い出すのかと、ジュスティヌは驚いてラファエルを見た。月の光に照らされたラファエルの顔は名工が彫り上げた彫像のごとく整っていて、人間離れた美しさだった。

「俺に騎士の誓いをお許しください。生涯、騎士として姫をお守りすることを誓います」

唐突な申し出に、ジュスティヌは戸惑う。ラファエルは近衛騎士の一人として、王女の護衛につけられているだけだ。

「あなたは、国王の騎士です。あなたの忠誠はこの国と王に向けるべきでは」

ジュスティヌの返答に、だがラファエルは食い下がる。

「たしかに俺は王の騎士です。でも、王や国へとは別に、心からの忠誠を姫にお捧げしたい。姫は我々のためにその身を捧げてくださった。俺はその献身に少しでも報いたいのです」

月の光の下、真剣な目で言われて、ジュスティヌは戸惑う。

「献身だなんて、わたくしは……」

ジュスティヌは視線を逸らし、長い睫毛を伏せる。

そんなのは買いかぶりだ。自分は言われるがままに嫁いだ愚かな子供に過ぎなかった。

自分が嫁いだおかげで戦争が終わったと、誰もが称賛するけれど、実態は何もできず、閉じ込められて慰み者にされていただけだ。それに何より、戦争そのものが――

だが、ジュスティヌは心の内の葛藤を言葉には出さず、ただ、湖面に映る月影に視線を動かした。

「空の月は、遠すぎるの。……絶対に届かなくて、見ていると辛い。だから……月のある夜には、わたくしは水に映る月が見たいの。一人で出かけてはいけないというならば、ならばあなたが、それを見せに連れて行って。……それなら……」

ラファエルがしばらく無言でジュスティヌを見つめてから、言った。

「姫が望まれるのでありますなら、必ず、俺が水に映る月の見える場所にお連れすることを誓います。――どのような場所にいても、必ず」

奇妙な誓い。だが、ラファエルはそれ以上何も聞かず、跪いたままジュスティヌの手を取ると、その甲にそっと口づけた。

湖を囲む黒い森が風にざわめき、水面に映る月影がさざ波に揺れる。青白い月の光が二人の髪を照らし、長い影が伸びていた。

第三章 騎士と恋人

六年ぶりに戻ってきたジュスティヌには、高位貴族からの誘いがひっきりなしにある。少しずつながらそうした催しへの参加を始めた王女の傍らには、常に護衛としてラファエルがぴったりと

張りついていた。

輝く銀髪と長身で均整の取れた体つき。彫像のように整った美貌を持つ彼が、儚げな悲劇の王女に影の如く付き添っている。

少人数のお茶会などにラファエルを従えて参加するたび、彼の際立った容姿が周囲の女性たちの視線を集めていることに、ジュスティヌも気づいていた。

実際、ジュスティヌの目から見てもラファエルは美しい。

だが、隣国の暮らしてジュスティヌの心はすっかり擦り切れて、ラファエルの美貌を見ても何か遠いもののような気がしていた。

『姫が望まれるのでありますなら、俺が水に映る月の見える場所にお連れすることを誓います。——どのような場所にいても、必ず』

あの夜、満月に照らされた湖で、ラファエルの言葉にジュスティヌの胸にはわずかなさざ波が立った。けれど、それは水に映った月を揺らす程度のもの。

——ラファエルは単なる護衛騎士。きつと誰にでも忠実な……

ラファエルはあくまで護衛に徹し、二人の間には明確な距離がある。

だから、ジュスティヌは自分たちの仲が密かに噂されているなんて、想像もしていなかった。

季節は春から初夏へと移っていく。

毎年、王の妹であるヌイイ公爵夫人が主催する仮面舞踏会は、王都の貴族のほとんどが参加する

盛大な催しであった。

仮面をつけての催しということで、王太子マルスランの薦めもあり、ジュスティヌはおしので参加することにした。おしのびとはいえ、近衛騎士の制服を着た護衛も付く。ただ、エスコート役のラファエルだけは制服ではなく、ありふれた貴族男性の装いで付き添うことになった。

社交の経験のないジュスティヌにとっては、初めての夜会となる。王家の正式な夜会に出る前に、場慣れさせて経験を積ませたいとマルスランが考えたのだ。

「でも緊張するわ。仮面舞踏会だなんて」

しり込みするジュスティヌに、ラファエルが励ますように言った。

「ヌイイ公爵邸は、湖を挟んで離宮の対岸となります。たいてい、舞踏会の夜は月が明るくて、湖に見事な月が映るのですよ」

「あなたは以前に参加したことがあるの？」

ジュスティヌに問われ、ラファエルが頷く。

「あの会は、毎年、王都じゅうの貴族が集います。若者も多く格式張らないので、初めて参加されるには、気楽だと思います」

いずれ、どこかで社交デビューはしなければならないなら、とジュスティヌは腹を括った。

当日、青いドレスに金色の仮面をつけたジュスティヌは、グレーの夜会服で盛装し、銀色の仮面をつけたラファエルの腕に手を預け、ゆつくりと広間に足を踏み入れた。シャンデリアの明かりが昼間のように広間を照らし、豪華に飾りつけられた華やかな会場に陶然となる。

隣国でも、夜会は頻繁に催されていたらしいが、ジュスティヌは一度として出席を許されなかった。

——要するに、妻どころか人間として扱われていなかったのよね……

大公にとって、ジュスティヌは隣国から奪い取った単なる愛玩人形でしかなかった。夫の死によって、ようやく光輝く世界に戻ることができたのだ。

もともと、最初は心が沸き立ったものの、着飾った貴顕淑女が溢れる華やかな広間は、世慣れぬジュスティヌにはただただ眩しくて、居心地はよくなかった。

そつと噛み殺したため息を、隣にいたラファエルは察知したらしい。

「バルコニーに出ましようか。あの方角からは庭の向こうに湖が眺められます」

以前に訪れたことのあるラファエルの提案に、ジュスティヌが頷いた。

人込みを離れて薄暗いバルコニーに出る。初夏の夜の湿った空気が心地よい。

仮面をつけた限られた視界から眺める夜空には、上弦の月が金色に輝いて、空と同じ深い紺青の湖にもやはり金色の姿が映っている。背後の広間から漏れる喧騒が嘘のように、湖と月は静寂の中にあつた。

「綺麗ね……」

ジュスティヌの唇から零れた呟きを、ラファエルが拾う。

「そうでしょう？ このバルコニーは毎年、あまり人も来なくて、いい場所なんです」

会場を振り返って苦笑するラファエルが、視線を動かして月を見上げた。

毎年、この場所に来ているらしい彼の言葉に少し引かかりを覚えながら、ジュスティヌも月を眺める。

「こんなに美しい光景なのに、パーティーに夢中で誰も気にしないのね？」

「ええ、月を気にするのはごく一部の人間だけです。……ここに来るたびに、人間どもの騒ぎを月は見下ろして、さぞやかましく思うだろうと考えてしまうのですが……」

月の考えることを予想しようとするラファエルの言葉が意外で、ジュスティヌがつい、噴き出した。

「銀月の騎士みたいなあなたにわからないなら、きつと誰もわからないでしょう」

ラファエルの銀色の髪が月の光に照らされて、青みを帯びて輝いていた。ジュスティヌの冗談に、仮面をつけていてもわかるほどのラファエルの美貌がかすかに柔らかに綻んだ。

「このバルコニーから見ると月はとても美しいので、ぜひ、姫にも見ていただきたいかったです」

そつと、寄り添いあつて月を眺める二人の後ろ姿は、誰の目にも恋を語り合っているように見え、王女と護衛騎士の二人が深い仲だとの噂が、真実味を帯びて語られ始めるのだった。

ジュスティヌが帰郷して二月が過ぎ、王都は本格的な夏を迎えた。

妊娠中の王太子妃イザベルは甘え盛りの幼い王女二人を持って余っていたので、ジュスティヌは

しばしば王太子夫妻の宮を訪れ、二人の王女たちと遊んだり、イザベルの話し相手を務めたりした。その日も、ジュステイーヌはイザベルの部屋のテラスでお茶を飲みながら、例によつてとりとめのないおしゃべりに興じていた。話題は、近づく湖上祭のこと。

イザベルが言う。

「もうすぐ湖上祭ですわね！　今年はどんな趣向の灯籠が出るか、今年の花火はどんなか、今から楽しみだわ。ジュステイーヌ様も湖上祭は六年ぶりですわね」

北国の短い夏の盛りを惜しむ湖上祭。

王都では毎年八月の満月の夜、郊外の湖にたくさんの船を浮かべて松明を掲げ、趣向を凝らした灯籠を製作してその意匠を競う。もちろん、花火も惜しげなく打ち上げられ、祭の雰囲気^{きふき}を盛り上げる。湖上には小舟が木の葉のように浮かび、水面に揺らめく明かりが天の星のごとく煌めくのだ。ジュステイーヌも六年ぶりの祭を楽しみにしていた。

「幼いころ、わたくし、あの小舟に乗りたいて我儘を言つて、お兄様に叱られましたのよ。今年は乗れるかしら」

ジュステイーヌがおつとりと言うと、遠く東洋から輸入した白地に青い染付けのカップを優雅に持ち上げたイザベルが、あら、という風に首を傾げた。

「……どなたかお誘いくださいましたの？　ジュステイーヌ様」

「いいえ。前に、お兄様は、あれは大人にならないと乗つては駄目だつておっしゃつて……。今はもう大人だから、乗つてもいいのでしょうか？」

「あれは、想い合つた男女で乗るものですわ。どなたかそういう殿方がいらつしやる？」

その夜のために、恋人のいる男たちは早くから舟と船頭を確保して、女を誘う。小舟から女神像に愛を誓えば、湖の女神の恩寵を受けて幸福が約束されるという。

兄嫁の言葉に、ジュステイーヌが目丸くする。

「そうでしたの!?　全然、知りませんでしたわ」

「わたくしもマルスラン様にお誘いいただきましたわよ？　結婚の前の年に」

イザベルが膨らんだお腹を誇らしげに撫でて言えば、ジュステイーヌが頷いた。

「そうそう、憶えていますとも。わたくし、お兄様がお舟を召されると聞いて、その舟に乗せてくれと言つて、騒いだんですもの。イザベル様を誘つた舟でしたのね。叱られるはずですわ」

王太子妃イザベルは先々代の王弟の孫である。二人は幼馴染で相思相愛の恋人同士であった。マルスランが湖上祭の舟の上でイザベルにプロポーズした逸話は、王都でも有名だった。

だが二人の婚約が調つた直後に、隣国の大公から横槍が入る。マルスランの妃に大公の妾腹の姫を、という申し出を、マルスランと王は突っぱねた。だがその代償として、幼いジュステイーヌが四十以上も歳の離れた大公に嫁ぐことになった。

マルスランとイザベルの結婚も、ジュステイーヌの犠牲の上に成り立っていたとも言える。

イザベルがさりげなく視線を動かし、意味ありげにラファエルを見た。それからイザベルはジュステイーヌに向き直る。

「ジュステイーヌ様、お舟に乗りたかったですら、ラファエルに頼んでみたらいかが？　きっと喜

んで舟を出すのではないかしら」

イザベルの言葉に、白い指で焼き菓子を摘まんでいたジュスティヌが、驚いて顔をあげた。

「お舟は恋人同士で乗るのでしょうか？ 恋人でもないのに、そんなこと頼めません」

恋人とはどういうものか、ジュスティヌはよくわからなかったが、自分とラファエルがそうでないことは間違いない。

ラファエルはただの護衛騎士だ。恋人の役を頼むことはできない。そう思うのに、イザベルは悪戯っぽく目元を笑わせて言う。

「確かに恋人同士で乗るものですけど、別に資格試験があるわけでもなし、恋人じゃなくてもバレはしませんわよ」

扇をパタパタ振りながらイザベルは笑った。

「だって、考えてもごらんさないな。もし、ジュスティヌ様に恋人がいたとして、その人がジュスティヌ様をお舟に誘ったら、絶対にラファエルもついていきますわよ？ 自分は護衛だから、姫様のお側を離れることはできません、とか何とか言って」

自分に恋人がいるという状況が全く想像できなかったが、二か月を過ごして、ラファエルが生真面目を通り越して空気の読めないほどの鈍感な人間であることには気づいていた。

恋人同士の舟に無表情な顔で割り込んでくるラファエルの姿を想像してしまい、ジュスティヌが扇を口元に当ててぶつと噴き出した。

おそらく同じ姿を思い描いていたのだろう、イザベルが笑いながら言う。

「そんなお邪魔虫なことになるくらいなら、最初からラファエルと二人で乗った方がマシでしょう？ ジュスティヌ様は要するにお舟にさえ乗ればよいのですもの。だったら別にラファエルでも何の問題もないわ」

イザベルのものすごい論理に、ジュスティヌはちよつとびつくりする。

たしかにジュスティヌは舟に乗りたかった。別に恋人じゃなくてもいい。でも――

「……何だかそれは……ちよつと違うんじゃないですか？ お義姉様」

不安になったジュスティヌは、背後に控えるラファエルを振り返った。

「ラファエル、今のお話、聞いていて？」

「は」

ラファエルが生真面目に頭を下げる。その美貌に視線を奪われつつも、ジュスティヌはおずおずと聞いた。

「お義姉様は、どっちもみち護衛としてついてくるのだから、最初からあなたに舟に乘せてもらいなさいとおっしゃるのだけど……ラファエル、あなたはと思う？」

ラファエルは表情一つ動かさず、騎士然として答えた。

「……はい。当日の警備の観点から申し上げますれば、姫君がご乗船なさる場合は、護衛騎士隊の誰かが同乗すべきと存じます。姫君からの特段のご指名がない場合は、責任上、隊長である俺自身が警護に当たることになりますかと」

「つまり……どのみちラファエルとは一緒に舟に乘る、と言う意味かしら。でもそれと、いつその

ことラファエルに舟に乗せてもらおうというのは、意味が違うように思うのだけど……」

ラファエルが紫色の瞳をまっすぐにジュスティヌに向け、続ける。

「我々としては、たとえ姫君に恋人なる者がいたとしても、お二人だけのご乗船は許可できません。恋人なる者の有無はともかく、湖上祭の小舟に姫君が乗る場合、俺が同乗いたします」

つまり恋人のあるなしにかかわらず、ラファエルは舟に乗ってくるということだ。

ジュスティヌが扇を口元に当てながら考える。

湖上祭の舟に乗るのは、ジュスティヌの幼い頃からの夢でもあった。恋人がいなくとも、ラファエルに頼めば小舟に乗せてくれる。その提案は抗いがたいほど魅力的だった。

「……その……恋人がいなくても乗ってもいいのかしら。昔、湖の上の小舟がとても綺麗で……舟の上からの光景もさぞかし素敵だろうと思って……」

上目遣いに見上げるジュスティヌを見て、ラファエルがかすかに頬を緩める。それから確かに頷いた。

「姫が望まれるのでありますならば。……湖上祭は満月の夜でございますから、水に映った月も見事でございましょう」

『姫が望まれるのでありますなら、俺が水に映る月の見える場所にお連れすることを誓います』

ラファエルとの以前の約束を思い出し、ジュスティヌはハツとした。

あの時の誓いを、ラファエルは守ろうとしてくれていたのだ。胸の奥に温かいものが満ちてくるような気がして、ジュスティヌもつい、顔をほころばせる。

「じゃあ、お願いしてもいいかしら。……ラファエル、わたくしを舟に乗せてくださる？」

「もちろん、姫のお望みとありましたら、このラファエル、身命を惜しみません。……ただ、王太子殿下のお許しが得られましたならば、ですが」

ラファエルが胸に手を当てて騎士の礼を執ると、ジュスティヌもニッコリ微笑んだ。

第四章 揺らぎ

湖上祭で小舟に乗りたいたいという姫君の無邪気な願いを叶えるために、ラファエルは王太子の許可を取りつけ、舟や船頭の手配など、さまざまな根回しに奔走した。

湖上祭は満月の夜。湖には丸い金色の月が映るはず。

姫君が水に映る月を眺める時は、どんな時でも連れていくと約束した。

これはただの、護衛の任務だ――

だが同時に、ラファエルは恋人でもない姫君と小舟に乗ることに対して、かすかな罪悪感も覚えていた。

ラファエルには三年越しで求婚している相手がいる。アギヨン侯爵の娘、ミレイユ。

茶色い髪に、ジュスティヌより少し暗い青い瞳をして、物静かでおとなしい性格の女性だ。

騎士養成所で同期だったフィリップの異母妹で、幼少期は母と二人、市井で育ったと聞いている。

庶腹のせいで侯爵家では冷遇され、庭の榆の木の下で青い瞳に涙を溜めて泣いていた。

ラファエルは彼女の涙に絆され、彼女を救い出すために求婚したのだが――

爵位のない男に娘を嫁がせるつもりはないと、侯爵に門前払いをくらってしまふ。

ミレイユとの交際は禁じられ、アギヨン邸への訪問も差し止められている。フィリップの協力で密かに手紙のやり取りを続け、人目を忍ぶ逢瀬を重ねてきた。

ヌイイ公爵家の仮面舞踏会にはラファエルの家にも招待状が来るので、ここ数年はそこで逢うことが恒例になっていた。

ラファエルが、^{ひとけ} 人気がなく景色のよいバルコニーを知っているのは、毎年、そこでミレイユと会っていたからである。

今年も、ミレイユからは当然のように誘いがあった。

だが今年は姫君が夜会に出席するため、その護衛で片時も離れることができない。ゆえに、ミレイユには仕事だからと、断りの手紙を出していた。

ところが、夜会で姫をエスコートする姿を、ミレイユは目にしたらしいのだ。

その結果、舞踏会の数日後に届いたミレイユからの手紙には、恨み言がびつちりと書かれていた。『仮面をつけているからわからないと思ったのかもしれませんが、一目であなただとわかりました。別の女性と腕を組んで現れたあなたを見た時、わたくしの胸がどれほど痛んだか――』

ジュスティヌ王女の護衛騎士に拔擢され、十人の護衛チームの指揮を任されたことはミレイユにも伝えているし、あの夜会に出ていたなら、ミレイユだって王女がおしのびで来ていると、わ

かっていたはずだ。

しかし手紙には、ラファエルが近衛騎士の制服ではなく、私服で姫君をエスコートしていたのがショックだったと書きつらねられていて、ラファエルは頭を抱えた。

――私服でエスコート役をしたのは王太子殿下の指示なんだが……

世事に疎いラファエルはミレイユからの手紙を読んで初めて、自分とジュスティヌの噂の存在を知った。一部ではまことしやかに、王家はジュスティヌ王女をラファエルに降嫁させるつもりだ、などと囁かれているらしい。

ラファエルはガシガシと銀色の髪を掻きむしった。

――姫君が俺に降嫁するだって？ そんなバカな！

ラファエルはため息をついて、とにかく誤解を解こうとミレイユに手紙をしたためた。

姫君の降嫁などありえない。国法で、王女の降嫁先は伯爵以上の有爵者もしくはその嫡男と決まっている。

ヌイイ公爵家の夜会で、私服でエスコート役を果たしたのは、姫君が非公式の出席だったからで、実際はただの護衛だ。

姫君との間にやましいことは何もない。

ラファエルは長い手紙を書くことができない質で、どうしても冷たく見えるほど文が簡潔になっ

てしまう。それでも最後になんとか愛の言葉を書き入れ、蠟を垂らして紋章の入った指輪を押つけて封蝋する。

従僕を呼び出して手紙を託け、ラファエルはもう一度、深いため息をついた。

たしかに、ジュスティヌの護衛騎士を拝命して以来、ラファエルはミレイユに会っていない。初めての責任ある仕事にいつばいいばいで、手紙も間遠まどおになっていた。これについては、ラファエルも申し訳なく思っている。

しかし、姫君をエスコートしたのはあくまで護衛の仕事の一環であり、そのことでミレイユに責められるのは納得がいかなかった。

ましてジュスティヌと恋仲であるとか、降嫁するとか、事実無根の噂は勘弁してほしい、と椅子の背もたれに寄りかかり、ラファエルは天を仰ぐ。

浮かぶのは、ミレイユの顔ではなくジュスティヌの顔だ。

——ただでさえ彼女は隣国で深く傷つけられたのに。こんな噂が耳に入ったら、きっとさらに傷ついてしまうだろう。

噂に傷ついたであろう恋人よりも、傷つくかもしれないジュスティヌを心配していることが、すでに自身の心が揺らいでいるせいだと、ラファエルは気づいていなかった。

湖上祭も近づく夏の盛り、ラファエルは父親に呼び出され、王都のジロンド伯爵邸に戻った。

王女の護衛騎士を拝命してから、ラファエルは城内の詰め所に泊まり込むことが増えていた。湖上祭の小舟やら警備の手配で忙しく、ここ数日、家に帰らずにいたら、話があるから是非でも帰宅せよと、従僕が使いに來たのだった。渋々、屋敷に戻れば父ばかりか兄ガブリエルまでが彼を待っていた。

「何事ですか？ 父上、兄上」

ジロンド邸の父の執務室で、ラファエルが尋ねる。

「ラファエル、先日王宮に呼び出されて、陛下から内々にだが結婚の打診があった」

「結婚？ まさか俺の？」

父の言葉に、ラファエルが驚いて目を瞠みはる。

「名譽なお話ゆえ、その場で承諾の返事をしておいた」

「承諾って、え？ どういうことですか？」

とつさに意味がわからず目をぼちぼちするラファエルに、父親が苦笑する。

「ジュスティヌ姫の降嫁先だ。もう王都じゅうの噂になっているだろう？」

ラファエルは呆然として言った。

「そんなバカな。王女の降嫁先は伯爵以上の当主もしくは嫡男と、国法で決まっているはずです！」
「だから、先日のヴィクトレ峠の件の褒賞と合わせ、お前を伯爵以上に賜爵ししやくし、その上でジュスティヌ王女を降嫁させるとのご意向を示されたのだ。滅多にないご厚情だと、もちろんありがた

くお受けしたぞ！　よかったな、ラファエル」

満面の笑みで父親に言われて、ラファエルは困惑を隠せない。

数か月前、隣国の大公が死んでジュスティヌへの虐待が明らかになり、王太子マルスランはジュスティヌ奪還には武力行使も辞さないと決意した。直属の近衛騎士の精鋭を派遣し、国境近くのヴィトレ砦では小規模ながら軍事衝突もあった。

その折に、ラファエルは功績を上げ、間違いなく褒賞も得られると自分でも確信していた。

ラファエルはその時、封爵を得たら、ミレイユに求婚するつもりだった。

しかし、封地の不足その他の理由をつけられ、ラファエルの封爵はならなかった。

ここにきて、王はヴィトレ砦での功績に対し、ジュスティヌの降嫁と抱き合わせで褒賞するつもりだというのだ。しかし、もともと封爵を求めていたのはミレイユとの結婚のためだから、ラファエルとしては返答に窮してしまう。

「どうした、ラファエル。王女の降嫁は我が家としても誉れだ。さ、乾杯だ！」

グラスを掲げてみせる父と兄とに、ラファエルは首を横に振った。

「待ってください、俺は——俺はすでにミレイユと結婚の約束が……」

「アギヨン侯爵の娘？　まだ続いていたのか？　王女との縁ができたのだ。どちらを選びか明らかじゃないか」

兄が呆れたように言う。

ラファエルは慌てて言う。

「ミレイユとの約束を違えるわけにはいきません」

ラファエルの生真面目な言葉を、父と兄が窘める。

「ラファエル、陛下が言うには、以前にもお前を叙爵するつもりだったのに、横槍が入ったそうだと反対したのは、アギヨン侯爵だそうだ」

その言葉に、ラファエルがハツとして顔を上げた。

「……まさかっ……」

「そのまさかだよ。三年前、爵位のないことを理由に求婚を退け、いざ、お前の叙爵が叶いそうになれば叩き潰す。アギヨン侯爵は、お前を娘婿に迎える気などさらさないのだ」

父親の言葉に、ラファエルが両膝を握り締める。

「ラファエル、陛下はジュスティヌ姫を降嫁させるにあたり、ボーモン伯爵の封爵を下賜すると約束してくださった。念願の叙爵、それも伯爵だぞ？」

父が言い、兄ガブリエルも同調する。

「我が家は代々、王家に忠誠を誓う王党派。一方、アギヨン侯爵は貴族の同盟を強化して王家に對抗する貴族派の領袖だ。もともと対立する派閥に属していることくらい、承知しているよう」

ラファエルが首を振る。

「そのような政治の派閥の話は、俺はよくわからない……」

「派閥の話は避けては通れぬ。真実、ミレイユ嬢を愛していたかもしれん。だが、その恋は報われぬ。そんな不毛の恋など忘れ、ジュスティヌ姫を選び、王女の婿という栄誉と、領地と爵位を得

た方がうんという。我が家の榮譽でもある」

父の言葉に、ラファエルは端麗な顔を歪めた。

「派閥、爵位、領地……俺はそんなもののために騎士になったわけでもないし、まして王女の降嫁を理由に封爵を受ければ、人からなんて言われるか……」

ミレイユから降嫁の噂について聞いていても、そんなことあるはずがないと思っていた。自分はただの護衛騎士であり、王女の降嫁先の条件にも合わない。そもそも姫君だって、結婚は望んでいないはずだ。

—— いったい、この話はどこから？ 姫君は、ご存じなのか？

姫君は結婚を恐れている。こんな話が裏で進んでいると知ったら、どうお思いになるか——
ラファエルの胸の内を不安が覆っていく。

「このお話、姫君はご存じなのですか？」

ジロンド伯はラファエルをじつと見つめた。

「さあ、どうであろうな。姫のご意向がどうであるか、一臣下にはわからぬ」

「そんな……姫君が、俺ごときの妻になるなんて……」

ラファエルが言えば、ジロンド伯が首を傾げる。

「ずいぶん、噂になっておるぞ？ ジロンド家の騎士と姫君は恋仲だと」

「事実無根です！ 俺はただの護衛で、俺と姫は何もない！」

唾を飛ばして力説するラファエルに、父も兄も納得の表情で頷いた。

「さもあるう。お前のような堅物が、護衛対象の姫君と深い仲になるなど、ありえないとは思っていた」

「そうそう、中身は朴念仁だし」

うんうんと頷く二人に、ラファエルは身を乗り出した。

「姫だって、護衛に軽々しく絆はだされるような方ではありません。そんな噂は姫君に失礼です！」

「噂の真偽はさておき、お前は姫と結婚するのは気に入らぬのか？」

その言葉に、ラファエルは慌てて首を振る。

「ど、とんでもない！ 俺などにはもったいない方で……」

すこし頬を赤らめたその様子に、父親と兄はそっと目配せしあう。

睫毛を伏せたラファエルに、ジロンド伯がなおも続けた。

「ジュステイーヌ姫が嫌いでないなら、なおのこと断るべきではない」

「でも、そんな仲ではないのです。結婚なんて畏れ多い……」

言いかけたラファエルを手で制し、父が言った。

「姫君が隣国で受けた仕打ちを聞いているか？」

ラファエルは曖昧に頷いた。

「……多少は。離宮に閉じ込められて、外界との接触を禁じられていたとか、それくらい……」

中庭の四角い池に映った月ばかりを見ていたというジュステイーヌの言葉を思い出し、ラファエルが言えば、父は深刻な表情になる。

「ラファエル、ここだけの話なのだが……」
ジロンド伯が身を乗り出し、声を潜めた。

「陛下がおっしゃるには、本来ならば、とても嫁に出せるような身体ではない、と」
ラファエルは紫色の瞳を見開く。

「……どういふ、ことです？」

大公の歪んだ執着を向けられていたとは聞いていた。だが――

ジロンド伯が低い声で続ける。

「嫁に出せないと言つても、子供が産めないと決まったわけではないそうさ。大公は性癖が歪んだ男で、離宮から救い出された時は身体中、傷だらけだったとか。中には永久に消えないものもあると」

ラファエルは衝撃を受ける。

「そんな暴力まで……」

ラファエルは自身の認識の甘さにうろたえた。脳裏にはジュスティヌの儚げな姿が過る。

実のところ、嫁ぐ前の彼女がお転婆だったという話を、ラファエルはどこか信じられないでいた。リスを追いかけたり、噴水の池で泳ごうとしたり、およそ今の、常に憂いをまとったようなジュスティヌからは想像もできない。だが――

自分が嫁ぐことで戦争が終わるなら、祖父のような年齢の男に嫁ぐことも迷わなかったと、ジュスティヌは言っていた。

国を背負う王女として、幼いながらも王族の矜持を抱いて嫁いだのだ。だがその先で待っていたのは、離宮に閉じ込められ、大公の愛玩人形として肉欲を向けられるだけの日々だった。

その上、身体に傷の残るような虐待まで受け、誇りと尊厳を傷つけられ、かつての明るさを失ったのだとしたら――

ラファエルは自身の身を切られるような辛さに、奥歯を噛み締める。国のため、平和のために我が身と人生を差し出した少女を暴力的に苛んだ大公が許せない。そして、姫の苦しみをまるでわかつていなかった、己のことも。

黙り込んだラファエルを横目に、父が静かに語る。

「虐待の具体的な内容については、陛下も口にされなかった。だが、姫は男性を恐れている。あるいは聞^きくことを受け入れられないかもしれない。そうなると跡継ぎの問題が発生するから、嫡男には嫁にやれぬ。特に壮年以上の男性への恐怖心が強いので、後妻も無理だ」

もともと出戻りであるため、帰国直後からジュスティヌ姫を後妻にと願^{ねが}い出る老貴族は後を絶たないが、すべて断っているという。

横から兄のガブリエルも口を挟んだ。

「貴族家の継承問題を考慮すれば、姫君を無理に嫁がせるべきでないことも、陛下はわかっておられる」

ラファエルは呆然として紫色の瞳をパチパチと瞬いた。

「姫は……修道院に入りたいと……そうか、それで……」

幸せは水に映った月のよう――

ジュスティヌの言葉の意味が、初めて心に沁みとおった。

彼女にとって結婚は恐怖でしかないのだ。嫁いってから六年間も、幽閉され暴力を振るわれ、愛も欲びも希望もない日々が続いたのだ。未来の見えぬ闇の中に囚われ、心身ともに疲れ、涙も涸れ果てて――

「出戻りとはいえ、姫君はまだお若い。再婚を望む声は止まないだろうし、修道院というのも外聞が悪い。何より……」

ジロンド伯がまっすぐにラファエルを見た。

「陛下は姫君には今度こそ、穏やかな結婚をしてほしいと望んでおられるのだ」

「穏やかな結婚を？」

「そうだ。だから陛下はお前に、この話を持ち掛けてこられたのだ。これが臣下として、そして父親として榮譽でなくてはなんだ？ 陛下はお前ならば、国のため犠牲になった姫君を支え、生涯変わらぬ忠誠と愛を捧げるはずと信じて、お前を選ばれたのだ」

父の紫色の瞳に慈愛の色が浮かぶ。

王も王太子も、ジュスティヌを心から愛おしみ、彼女の幸せを願っている。

だから、あえてラファエルに白羽の矢を立てた。ラファエルならば、ジュスティヌを虐げまい。たとえジュスティヌが閨事を拒んでも、誠心誠意、彼女に傳くに違いないと。

王女の降嫁先選ばれたことよりも、息子の為人が王と王太子の眼鏡に適ったことを、ジロンド

伯が榮譽に感じていると伝わってきて、ラファエルは理解した。

――つまりこの結婚は、護衛騎士の仕事の延長のようなものだ。

ラファエルは父の目をまっすぐに見て、言った。

「……そういうことでしたら、わかりました。俺は姫に生涯の忠誠を誓っております」

国のために犠牲になり、心にも身体にも傷を負ったジュスティヌを守るために、自分の人生を差し出すことに迷いはなかった。

「陛下がおっしゃるには、白い結婚になるかもしれないがと……」

兄が言うが、ラファエルは微笑んだ。

「そんなことは構いません。もともと、姫は俺なんかにはもったいない高貴な方です。結婚が名目的なものであっても、俺は一向に気にしません」

だが、ラファエルには一つだけ気がかりがあった。

王女の降嫁を受け入れるからには、ミレイユとの結婚は諦めざるを得ない。

「……姫君がミレイユのことを知ったら、俺を軽蔑なさるのでは……」

封爵と王女という餌につられて、ミレイユを捨てたと勘違いされるのではないか。

ラファエルの心配をジロンド伯は鼻で嗤った。

「まさか。お前とミレイユ嬢との話は、三年前に求婚を断られた時点で終わっている。誰が咎めるというのだ」

「それはそうですが……」